

高2 東大 国語



【問題】(演習)

出典：柳宗悦『工藝の教え』／一橋大学 95年

文章略解

解答に同じ。

解答

人間が対象を捉える場合、分析的把握を試みる態度と総合的に把握しようとする態度の二つがあり、両者が補い合って完全な理解に達するが、焼物のような美的対象は全体的な美を表現するものであり、その構成要素を個別に理解してゆこうとする分析的把握では個別化された要素をいくら重ね合わせても全体の把握はできない。したがって総合的に把握する視点を基盤にして、それに加えて分析的な手法を用いた見方をすることが望ましい。(199字)

出典：加藤周一『私の立場さしあたり』／筑波大学 A 前期日程 94年

文章略解

私は知識と信念を区別する。知識の根拠は三つあるが、信念の根拠は時と場合によって異なり、合理的でも非合理的でもあり得る。私が知識を求める動機は、自分の知識欲を満足させるためであり、また、対象についての知識が、その対象を支配する能力の増大につながるかと考えるからである。しかし、社会における知識の総体の増大は、それを利用する者の支配能力をも増大させることになり、その社会にすむ人々の幸福につながるとは限らない。同様に、個人にとっても知識欲の満足が望ましい生き方であるとは限らず、私が知識を求めるのは、廃し難い習性にすぎない。

解答

問1 知識の根拠は感覚的経験や推論、検証可能な結論であるが、信念の根拠は、個人的経験や直観などで、場合によって異なる。
〔56字〕

問2 ① 科学的な知識の方が日常的な知識よりも、根拠となる推論の手続きが複雑である点。
② 科学的な知識の方が拡がりが大きく、日常的な知識の多くを包摂している点。
③ 日常的な知識は、その獲得が対象を支配する能力を増大させるが、科学的な知識は、総体として増大することで、それを利用する組織の環境支配能力を増大させる点。

問3 科学的な知識の増大は、それを利用する組織の環境支配能力をも増大させることであるから、知識の普及は、それを利用する者や目的などによって、社会的に有益な結果を生むばかりでなく、悪い結果も生じさせることになるということ。〔107字〕

問4 知識獲得は組織の環境支配能力を増大させることにつながるが、そのことの善悪が相対的なものである以上、必ずしも個人の幸福増大に結びつくものではないから。〔74字〕

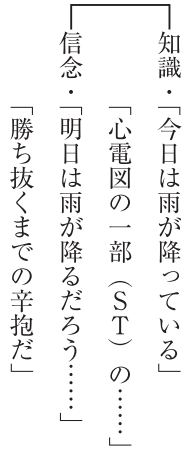
解説

問1 本文は、各段落のテーマがおおよそ段落冒頭に示されている。すなわち、第一段落「私は知識と信念とを区別する」第二段落「知識の根拠は、おおよそ次の如くである」第三段落「信念の根拠は、場合によって異なる」などだ。

〔第一段落〕

私は知識と信念とを区別する。

↑(例) たとえば……



〔第二段落〕

知識の根拠は、おおよそ次の如くである。

- ・ 第一、単純な感覚的経験 ↑(例・雨の音、雨の光景、ST曲線)
- ・ 第二、少数の単純な、証明できない前提と、若干の論理上の規則から成る推論の手続き、
- ・ 第三、検証可能な結論(補足・検証の結果、そのときまで、……)

→

(補足) 日常生活のなかでの知識と、科学的な知識とのちがいは、……
(否定例) 古典的な哲学は、知識の体系ではない。

〔第三段落〕

信念の根拠は、場合によって異なる。

（例）

「明日雨が降るだろう」→権威への信頼
「日本がいくさに勝つだろう」→希望と将来の現実との混同
「鉄斎は偉大な画家である」→極めて複雑な、したがって万人に共通ではない経験
「天は人の上に人を造らず」→個人的および社会的に条件づけられた本質直観

信念の根拠は、時と場合により、合理的でもあり得るし、非合理的でもあり得る。

（例）合理的に考えられた信念の体系は、その人の哲学である。

以上の段落構成から、「知識」については第二段落の、「信念」については第三段落の、それぞれ罫線で囲った主旨の部分に基づいて解答を考える。但し、「知識」については、第一第二第三という箇条書きになっていて、これでは長い。両者の対立関係を明らかにする上でも、「信念」との比較からその本質をつかまえよう。「時と場合により」「異なる」のが「信念」であるから、時と場合のいかに関わらず異ならない、即ち最低限の普遍性を「知識」に求めているのではないかと考えて、「知識」の各箇条や例と照らし合わせてみる。

問2 問1解説の図式で見た通り、「日常生活のなかでの知識と、科学的な知識とのちがい」については、第二段落後半に補足として述べられている。

日常生活のなかでの知識と、科学的な知識とのちがいは、

① 推論の手続きが、後者の場合により複雑であるということ、

+ (また)

② 知識の拡りが、後者の場合により大きいということであろう。

→

(例) 日常的な知識の多くは、科学的な知識のなかに含まれる。

しかし、これでは二つにしかない。設問では三つ求めているわけだから、あと一つを別な場所で探すことになる。そこで後半に目を移して「日常生活」「科学的な知識」という語がセットで出てくる箇所がないかと見てみる。「それは日常生活において明らかなことである。科学的な知識については、いくらか事情が異なる。」という箇所に気づくだろう。

まずは「日常的な知識」のほうだが、「それ」という指示語で受けられているのは、「自動車についての知識がなければ、いかなる信念に燃えていようと、自動車を動かすことはできない。」という例で支えられた「ある対象についての知識が、その対象を支配する能力を増大させる」である。

次に、先の箇所に続く「科学的な知識」に関する叙述を見ていく。「たとえ私がいくらかの知識を獲得しても、そのために私が私の環境を支配する能力は、ほとんど増大しないだろう。そうではなくて、」とある。これは、否定である。「科学的な知識」について否定されている内容は、対立する「日常的な知識」では肯定されることになる。日常的な知識の獲得が、個人の対象・環境(例えば自動車)の支配能力を増大させるのだ。

【ポイント】 否定されている内容は、対立項の説明となりやすい。

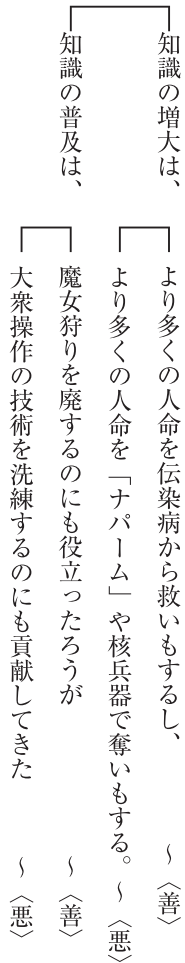
一方「科学的な知識」についてはどうかというと、先の否定の直後に、「私が発展の何万分の一かに貢献するところの科学的な知識の総体の増大が、それを利用する組織の、環境支配能力を、ほとんど無限に増大させるのである。」と書いてある。個人ではなく、組織の環境支配能力増大に関わるわけだ。

問3 第四段落の文章構成から、この傍線部の例が一体何を言いたいためのものなのかを考えてみる。

そのこと（＝科学的な知識……それを利用する組織の、環境支配能力を、ほとんど無限に増大させる）科学的な知識の効用）の善悪は、俄に決し難い。誰が、何のために、どういう知識を利用するか。時と場合によ（る）

→

（例）



野線で囲った部分を根拠として解答を作成する。

問4 第四段落後半から、第五段落にかけての文章構成を見てみよう。

その（＝科学的な知識……それを利用する組織の、環境支配能力を、ほとんど無限に増大させる）こと ↓の善悪は、俄に決

し難い

（例）誰が、何のために、どういう知識を利用するか。時と場合により、……

知識の総体の無制限に大きくなること、↓一社会にとって……よいことであるかどうかは、大いに疑わしい、と思う。

↳

知識欲を満足させることが、↓個人にとって、望ましい生き方であるかどうかは、なおさら疑わしいだろう。

（無為にして化するの道は ↓かえって、人生の幸福に大切であるかもしれない。）

↳

私が知識をもとめるのは、何らかの価値の確信にもとづくのではない。習いの性となつて、俄にこれを廃し難いからにすぎない。

以上の構図を問3で見た内容と結び付けて考えると、知識獲得は組織の環境支配能力を増大させることにつながるが、そのことに関する善悪の価値の確信がない上、必ずしも個人の幸福増大に結びつくとは限らない、ということになる。

出典：丸山圭三郎『言葉と無意識』／オリジナル問題

文章略解

「ロゴス」とは本来的に「集積し、多種多様なものを分類・整理する」ことである。ものに名称を付け分類整理することによって森羅万象は人間にとってはじめて意味のある存在となり、それによって人間ははじめて対象を認識し把握できるようになる。したがって言葉は存在そのものでもある。そして、言葉によって周囲の森羅万象を分節することは、同時に人間が世界の中で自らの占める位置を理解することでもある。

解答

問1 c

問2 多種多様な存在を概念化することによって分類、整理し、個々の存在に人間が意味を見出し認識の対象とすることができるようにする力。〔62字・解答例〕

問3 個々の概念を、その上位に位置する概念を用いて同種のものに分類すること。〔35字・解答例〕

問4 a

問5 言葉によって切れ目なく連続した世界を分節することによって、人間も自らが世界の中で占める位置を理解するということ。
〔56字・解答例〕

特別問題

文章略解参照〔190字・解答例〕

出典：田中克彦『言語の思想』／オリジナル問題

文章略解

母国語という言葉は、母語に「国」が紛れ込んだもので、結果として言葉が国家に委ねられ、国語を意味することになった。しかし、母語とは、母の属する言語共同体の言語であり、固有かつ運命的なものである。したがって、言語共同体の規模に関わらず、すべての母語は対等であり、その使用は生まれながらの権利だ。が、ある母語は国語となり、ある母語は国語に支配される。だから、母語を国語と訳すことは、大きな誤りだ。

解答

問1 4 問2 5

問3 4 問4 3

問5 母語は固有の運命的なものであり、国家語である国語に従属させられることもあるから。〔40字・解答例〕

問1 それとなく教示すること。

問2

〔テーマ〕

マザー・タンクにあてられた日本語の訳は「母国語」である。

〔例証・理由〕

さらに示唆に富むのは、これを「自国語」と訳している例があることである。

←

〔結論〕

日本人にとっては……「母」なんかはどうでもいいつけたしであって

↓必要な訳語は

A

だったということである。

以上の構成で、「マザー・タンク」の訳語として、「母国語」の「母」は余計であることが述べられている。だから「母国語」から「母」の語をとってしまえば **A** の答がわかる。また、「自国語」と結びつく語、という観点からも、選択肢を選ぶ。

〔反論〕

ことばは後天的（生まれた後）に学習によって獲得されるのであって……

〈が〉

〔理由〕

幼児期における言語の獲得と、その無意識のうちに定着した、特に発音行動様式の強い排他性とは、やはりことばが肉體と不可欠に結びついているかのような印象を与えやすい。（固有であり、先天的なものに近い、ということ。）

+ 「しかも」

その運命づけられた不可逆性（もう一度初めから言語獲得をやり直せない、ということ。）は、ますますこの印象を強化するのに役立つている。

↳ 〈だから〉

〔結論〕

母語と個人との出会いは、こうした運命のつかさどる領域であり、人間の出会う不合理の中でも最も不合理なもの一つである。

↳

B
このような不合理な運命づけ

右図のような構成になっている。「このような」「こうした」という指示語の指示する箇所を辿っていくと、設問文で「なぜ？」と理由を尋ねていることから、「だから」という因果関係を示す順接の接続詞の受ける部分が重要になる。後天的な学習による経験的なものだとすると、母語の選択に自由意志がきくように思われるが、さにあらず。それがきかない点で、先験的と言える。——以上がこの趣旨。

問4

- 1 「人は、こうした相異を肉体的な相異に結びつけたくなるほどである。」「ことが肉体と不可欠に結びついているかのようない印象を与えやすい。」と書いてあるとおり、事実として「もとづいている」わけではない。
- 2 これは、「が」という逆接の接続助詞で受けられている以上、筆者の言いたいこととは逆になる。
- 3 そんなことは、述べられていない。
- 5 「言語共同体」に関わるこの話題は、傍線部B「このような」で受けられる話題のさらに後に初めて出てくる話題。

第六段落末「母語は運命であるから、皮膚の色と同様に、いったん身についてからは、その個人から引き離して、別の言語で置きかえるわけには行かない。」も参照してほしい。「母語」「運命」なる語が出てくることから、ここも解答の根拠となる。

〔反論〕

→

・こうした言語共同体ごとの規模には、ほとんど無限に近いほどの差がある。

(例) 血縁に結ばれ……

・社会の発展図式にあてはめて言えば、……

〈しかしその一方で〉

それぞれの母語は、(否定) 集団の規模や発展段階の序列にかかわりなく
(肯定) 母語というかぎりにおいては対等である。

以上の構成による対立関係から考える。「序列」と「対等」は対義語。

- 1 「尊さ」の問題ではない。
- 2 「本来の姿」が問題なのでもない。
- 4 「発達」の問題は「発展段階」と結びつき、右図の対立関係に反する。

5 「運命」の問題でもない。

問5 まず、「母語」と「国語」の定義を、本文に基づいてしっかりと行い、両者の違いを明らかにする。「母語」については、第四段落から第五段落でみてきた通り。母の言語共同体と結びついた、固有かつ運命的なもの。「国語」は、直前の第八段落に、「国家の言語」「国家語」と説明されている。両者が結びつかない点も、この段落に述べられている。

出典：『伊勢物語』百一段 / 弘前大学 97年

現代語訳

昔、左兵衛さひょうゑの督かみであつた*在原行平はらゆきへいという(人が)いたのだった。その人の家に良い酒があると聞いて(人々が集まったので)、清涼殿の殿上みやうじやうの間に出仕していた*左中弁藤原良近さなかつらふぢという(人)を、主客しゆかくということにして、その日は酒宴の仕度をしたのだった。(行平は)風流のたしなみのある人で、瓶びんに花をさして飾っていた。その花の中に、不思議にすばらしい藤の花があつた。(その)花の垂れている花房はなぶら(の長さ)は、*三尺六寸さんしゃくろくじゆんほどあつたのだった。(そこで一座の人々は皆)その花を題にして歌を詠む。(ところが、ちようど)歌を詠み終わるころに、主人(「行平」)の兄弟である(男が)、(行平が)饗応の酒宴を催していらつしやると聞いてやってきたので、引き止めて(歌を)詠ませた。(その男は)もともと歌のことは何も分からなかつたので、辞退したけれども、(皆が)無理に詠ませたので、このように(歌を詠んだ)

* 咲く花の……(今日はこのみことな藤の花が)咲いている花房の下蔭かげに隠れている人が多いので、以前にもまして立派な藤の蔭かげであることです

(ところが、一座の人たちが)「どうしてそんなふうふうに詠むのだ」と言つたので、(男は)「太政大臣(藤原良房)様が栄華の絶頂たつぎにおられて、藤原氏が、格別に榮えているのを思つて詠んだのです」と説明した。(すると、その言葉を聞いて)一座の人々は皆、(この歌を)非難せずひなんせずじまじまいになつたのだった。

〔訳注〕

* 左兵衛の督——六衛府りくゑふの一つである左兵衛府の長官。内裏の門の警備や天皇の外出の警護などを担当した。

*在原行平——業平の兄。貞観六年左兵衛督に任ぜられた。

*左中弁藤原良近——「弁」は太政官に属する庶務担当の職で、左右に分かれ、大・中・小の三等があった。藤原良近は貞観十六年、左中弁となる。強力の人であったという。

*三尺六寸——約一メートル余り。

*咲く花の——藤原氏の庇護をこうむっている人が数多くおられるので、以前にもましてさかんな藤原氏御一族の栄華でございます。

解答

問1 ① 清涼殿の殿上に出仕していた ② 饗応（酒宴、もてなしの宴、なども可）

問2 (ア) 風流（情趣）を解する人 (イ) 在原の行平

問3 不思議なほどすばらしい、花房の長く垂れた藤の花〔23字・解答例〕

問4 まらうど

問5 (ア) 兄弟（または「弟」） (イ) 在原業平

問6 人々飲まむとて来たりけり

問7 (1) A 〓を B 〓み

(2) 今日はこのみごとに咲いている藤の花房の下蔭に隠れる人が多いので、以前にもまして立派な藤の蔭であることです。

(3) 太政大臣藤原良房が栄華の絶頂にあることを巨大な藤の花房になぞらえて、酒宴の主客である藤原氏一族の繁栄を寿ぐと

いう意図。

問8 たまふ・尊敬・ハ行四段活用 / みまそがり・尊敬・ラ行変格活用

問9 あ||竹取

い||宇津保

う||落窪

え||土佐

お||蜻蛉

か||大和(平中)

き||歌

く||源氏

現代語訳

良家といった宰相の兄弟(の中)に、大和の掾という人がいた。この人が本妻のところに、筑紫から女を連れて来て住まわせていたのだった。本妻も氣立てがたいそう良く、新しい妻もいやな心がなく、たいそう仲良く暮らしていた。こうして、この男はあちらこちら地方の国に出歩くことが多かったので、(妻たち)二人だけで住んでいたのだった。(そうこうするうちに)この筑紫(出身の)の妻が、人目を忍んで(ほかの)男と関係してしまった。(筑紫出身の妻は)このようなことをするけれども、本妻は、たいそう氣立ての良人であるので、夫にも(そのことを)言わないで過ごし続けていたが、(夫は)ほかのつてから、「筑紫出身の妻は)このようにほかの男と関係しているそうだ」と聞いて、この夫は、(筑紫出身の妻に)「その人と私と、どちらを愛しているのか」と尋ねたところ、(筑紫の)女は、

花すすき……花すすきはあなたの方になびくようです。思いがけない山の風は吹きますけれども「||思いがけなく、ほかの男から言い寄られましても、私はあなたの方を愛しています」

と言った。

また(ほかに)、(この筑紫の女に)言い寄る男もあった。(女は)「男女の仲(というものは)は(思うようにいなくて)辛い。やはり(その)男とは関係を持ちますまい」などと言っていたけれども、この男を次第に好きになったのだろうか、(女は)この男の(手紙に)返事などをしてやって、この本妻のもとに、手紙を結び文にしてよこしたのだった。(本妻が)見るとこのように書いてあった。身を憂しと……(ほかの男に心ひかれる)我が身を情けないと思う心が、(まだ)懲りていないから、(またほかの)人をしみじみ恋しいと思いはじめているのでしょうか

と、性懲りもなく詠んでいた。

こうして、(筑紫の女は)心の隔てなく無邪気であるので、(本妻は)たいそうしみじみとかわいいと思っているうちに、夫は心変わりをしたため、以前の(筑紫の女を愛する)こともなくなったので、(筑紫の女は)あの筑紫に親兄弟などがいたので(筑紫へ帰って)

行ったが、(夫は女を)留めないで帰してやった。本妻は、(筑紫の女と)一緒に暮らし慣れていたので、(女が)このように(筑紫へ帰って)行くことを、たいそう悲しいと思った。(本妻は)山崎に(女と)一緒に行って、舟に乗せなどした。夫も(そこへ)やって来た。この後妻(「筑紫の女」と本妻は、一昼夜さまざまなことを親しく話し合っ、翌朝(筑紫の女は)舟に乗った。今は(もう)夫と本妻は帰ろうということで車に乗った。誰もかれも「夫も本妻も」が、たいそう悲しいと思っっているうちに、(使いの者が)舟に乗った人(「筑紫の女」)の手紙を持ってきた。(その手紙には)このようにだけ書いてあった。

ふたり来し……(あなたと)二人(「夫と筑紫の女」)で(仲良く)来た船路とも思えない波の上を、思いがけないことに(あなたは、私一人で)お帰しになるようですね

と言っていたので、男も、本妻も、たいそうひどくしみじみとした気持ちになって泣いてしまった。(舟を)漕ぎ出して行ったので、(筑紫の女に)返事をすることもできない。車は舟が行くのを見て、立ち去ることができず、舟に乗っている人(「筑紫の女」)は、車を見るところで顔をさし出して、(沖へ向かって)漕いでいくので、(舟が)遠くなるにつれて、顔がたいそう小さくなるまで(筑紫の女はこちらを)見ていたので、たいそう悲しかった。

解答

問1 (オ) 問2 (ウ)

問3 ① (エ)・(オ) ② (エ)＝(b) / (オ)＝(e)

問4 (2)＝(エ) (3)＝(ウ) (4)＝(エ) (5)＝(ア) (6)＝(ウ)

問5 (エ)

問1 和歌の解釈問題。まずは口語訳をして正確な意味をつかむ。その上でこの歌の場合は、「花すすき」と「山の風」がそれぞれ何を表しているのかを考えて、歌に詠まれている心情を読み取る。

まずは品詞分解をしながら口語訳を試みる。「花すすき」は「穂の出たすすき」のこと。「かた」はここでは「方向」の意を表し、「君がかた」で「あなたの方」という意味になる。「なびくめる」は、カ行四段活用の動詞「なびく」の終止形に、推量の助動詞「めり」の連体形「める」が接続したもの。「める」は強意の係助詞「ぞ」の結びである。「思はぬ」は、ハ行四段活用の動詞「思ふ」の未然形「思は」に打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」が接続したもので、ここでは「思いもかけない」という意味になる。「吹けども」の「ども」は逆接の接続助詞。そこで口語訳をすると、「花すすきはあなたの方になびくようだ。思いもかけない山の風が吹くけれども」となる。この歌は倒置法が用いられている。

次に、歌が詠まれた状況を考える。この歌は、女がほかの男と関係しているといううわさを聞いた夫、すなわち大和の掾が「その人とわれと、いづれをか思ふ（その男と自分と、どちらを愛しているのか）」と尋ねたことに対する答えである。そこで、思いがけず吹く「山の風」は、女に言い寄ってきた男のことを指し、「花すすき」は女自身を指していると考えられる。すると、歌の意味は「思いがけなく、ほかの男から言い寄せられたけれども、私はあなたの方になびきます」となり、女は、ほかの男よりも、あなた、つまり大和の掾の方に心が引かれると言っているのである。したがって正解は(オ)となる。

(ア)は「責められる」に該当する語句がなく、(イ)も「思慮の浅い」や「愛のない」に該当する語句がないため、不適切。(ウ)は「愛してくれぬ人にそむいて」という解釈が不適切。(エ)は「あなたの御意向に従う」が男の問いに対する答えとしては不適切である。

問2 内容理解の問題。まずは正確な口語訳をした上で、「この男」が誰をさすのかを考える。

品詞分解をしながら口語訳を試みる。「やうやう」は「次第に、だんだんと」という意味の副詞。「思ひやつきけむ」は名詞「思ひ」に疑問の係助詞「や」、カ行四段活用の動詞「つく」の連用形「つき」、過去推量の助動詞「けむ」の連体形「けむ」が接続したものである。なお、「思ひ付く」という動詞もあり、「心が引かれる、好きになる」という意味を表す。そこで、傍線部を口語訳すると、「この男を次第に好きになったのだろうか」となる。そこで、「この男」が誰を指すかという問題であるが、直前の文に「またよばふ男もありけり（またほかに言い寄る男がいた）」とあり、大和の掾のほかに、女に求婚した男がいたことがわ

かる。そのあとを見ると、「なほ男せじ（やはりこの男とは関係するまい）」と、女が交際を拒否する意向を口にしていたものの、「ものから」という逆接の接続助詞で傍線部の内容が続き、女が男に引かれていくのが暗示されている。「この男」は「よばふ男」、すなわち求婚者のことである。したがって正解は(ウ)となる。

(ア)と(エ)は「この男」を大和の掾と解釈しているので不適切。(イ)は「この男」という語句をそのまま使っているので、求婚者を指すとも考えられるが、「思ひつく」を「気づいた」と訳しているので不適切。(オ)も「思ひつく」を「思案にあまる」と解釈しているので不適切。なお、(イ)と(エ)は「やうやう」を「やっと」の意味でとらえているが、「やうやう」という語は、平安時代ではほとんどが「次第に、だんだんと」の意味で用いられている。

問3 和歌の解釈問題。まずは、歌を直訳し、その上で歌が詠まれた状況を考慮して、どのように解釈できるかを考える。

① 指示内容の問題。まず、歌を直訳してみる。「身」は、一般的には歌を詠んでいる人自身の身、すなわち「我が身」と考えられる。「憂し」は「つらい、情けない」という意味の形容詞。「思ふ心」の「心」も、上からの続きとして歌を詠んでいる人の心と考えられる。「こりねばや」は、ラ行上二段活用の動詞「こる（懲る）」の未然形「こり」に、打消の助動詞「ず」の已然形「ね」、接続助詞「ば」、疑問の係助詞「や」が接続したものの、「こる」は「懲りる」という意味である。「ば」は已然形に接続しているので、確定条件の原因・理由を表す。「あはれ」は「しみじみとした情趣、深い感動」といった意味を表す名詞。「思ひそむらむ」は、マ行下二段活用の動詞「思ひそむ（思ひ初む）」に現在推量の助動詞「らむ」の連体形「らむ」が接続したものであり、「思ひそむ」は「思い始める」という意味である。そこで、歌を直訳すると、「我が身を情けないと思う自分の心が懲りないので、人をしみじみ恋しいと思いつ始めているのだろうか」となる。

前後の話の内容から考えて、この歌は筑紫の女が詠んで本妻に送ったものである。この女は、大和の掾以外の別の男からも言い寄られて、その男からの手紙に返事などをしている。このような状況を踏まえると、まず、女が恋しく思い始めた「人」とは、女に言い寄った男、すなわち「よばふ男」と考えられる。次に、「人」について別の解釈をしてみると、女に言い寄った特定の一人の男を指すのではなく、いわゆる男という意味で、「一般的に男というもの」とも考えられる。もちろんこの中には、実例として、女に言い寄った男も含まれる訳だが、具体的に「あの人を恋し始めた」というのではなく、「男を恋し始めた」とも解釈できる。したがって正解は(エ)と(オ)になる。

なお、(ア)の「良家」は大和の掾の兄弟で、筑紫の女とは直接の関係はないので不適切。(イ)の「大和の掾」とウ)の「しのびて男したり」の男」は共に、この場面で筑紫の女が恋をしている相手ではないので、不適切。

② 指示内容に基づく歌全体の解釈問題。

まず、「人」を「よばふ男」と解釈した場合を考える。先の歌の直訳に「よばふ男」をあてはめてみると、歌の下の句には、筑紫の女が自分に言い寄ってきた男を恋し始めていることが述べられている。その理由が上の句に述べられているわけだが、「我が身を情けないと思う自分の心が懲りないので」とは、自分を愛し大切に思ってくれる大和の掾がいながら、ほかの男と関係してしまう自分自身を嘆いているものの、後悔が足りず、懲りていないから、という意味で、そのためにまたしても別の男に愛を感じてしまったと告白しているのである。したがって正解は(b)となる。

次に、「人」を「一般的に男というもの」と解釈した場合を考える。歌の下の句は、男を恋し始めている、ということである。先の内容と大差ないが、その理由としての上の句の解釈が多少異なってくる。もちろん、上の句も先と同様に解釈して、ほかの男と関係したことに對する後悔が十分ではないので、性懲りもなくまた男を好きになってしまったとも読める。が、もう少し詠み手の気持ちを深く追求してみると、「我が身が情けない」とは、単に、安易に男に心引かれてしまうことへの嘆きだけではなく、次々に男に心引かれながらもなかなかそれが幸せに結びつかない自分の運命に對する嘆きとも解釈できる。所詮自分は男の愛に恵まれない運命だとは思いつつも、それでも性懲りなく男を愛していく、というのは、結局自分が孤独に耐え切れない弱さを持っているため、誰かを求めずにはいられないからである。ここから弱々しい女心を読み取ることもできる。したがって、正解は(e)となる。

なお、(a)は「人」を「山の風」の男(『しのびて男したり』の男)と考えた場合の解釈なので不適切。また、(c)の「もとの男へのとりなしを頼む」や(d)の「何とか整理をつけてほしいと願う」は、いずれも本妻への依頼になるが、歌の内容としてそのような意味合いはないので、これらも不適切である。

問4 主語を問う問題。文脈を丁寧にたどりながら、動作主を見つめる。

(2)・(3)は一続きの文脈なので、合わせて考える。まず「かくて」以下を直訳してみると、「こうして、心の隔てなくしみじみと心打たれる様子であるので、たいそう心打たれると思ううちに」となる。傍線部(2)「あはれなれば」は形容動詞「あはれなり」

の已然形「あはれなれ」に接続助詞「ば」が続いているところから、この「ば」は確定条件の原因・理由を表しているので、(2)と(3)の主語は異なることが察せられる。ここは筑紫の女の歌に続く箇所だが、この歌は先に見た通り、女の本音が吐露されていて、本妻に向けて詠まれたものである。そこで、「心のへだてなく」は、筑紫の女が本妻に対して心を隔てることなく、自身の心情を打ち明けているという意味に解釈できる。したがって、それに続く「あはれなれ」は筑紫の女の様子を表していると考えられる。ここでの「あはれなり」は、またしてもほかの男を愛してしまったことを素直に告白している歌の内容から、女の無邪気さを表している。一方、女の無邪気な様子に対して、「いとあはれと思ふ」のは、当然女の歌を手にして見た本妻である。ここでの「あはれ」は「しみじみとかわいい」という意味で、本妻は女を好意的に受け止めているのである。したがって正解は、(2)が(エ)、(3)が(ウ)となる。なお、選択肢の(ウ)「もとの妻」とは本妻のことであり、(エ)「今の妻」とは筑紫の女のことである。

次に、(4)・(5)を合わせて考える。本妻が筑紫の女を好意的に思っているのに対して、肝心の夫は、女に対する気持ちが変わり、以前のように愛せなくなっている。それが描かれているのが、「男は心かはりければ、ありしごとあらねば」の箇所である。そこで、あの筑紫に親や兄弟などがいたので行く、と話が続く。「かの筑紫(あの筑紫)」と書かれているところからも明らかのように、「筑紫」は夫の新しい妻となった女の故郷であり、「親はらから」も女の親兄弟を指している。そこで、筑紫に行くのは当然女となる。夫に見放されたため、故郷に帰っていくのである。一方、そのあとに続く「とどめでなむやりける」について考える。「とどめでなむ」は「制止する」という意味のマ行下二段活用動詞「とどむ」の未然形「とどめ」に、打消の接続助詞「で」、強意の係助詞「なむ」が付いて、「帰ろうとしている女を引きとめないで」という意味になる。さらに「やりける」は「人を行かせる」という意味の動詞「やる」の連用形「やり」に過去の助動詞「けり」の連体形「ける」が接続したもので、「女を筑紫に行かせた」という意味になる。女を引きとめせずには帰ってしまったのは、もはや女に対する愛情が薄れて未練もなくなってしまう夫、大和の掾の行為と考えられる。したがって正解は、(4)が(エ)、(5)が(ア)となる。

最後に、(6)の「舟に乗せなどしける(舟に乗せなどした)」であるが、傍線部の直前に「山崎にもろともに行きて」とある。「山崎」は舟に乗る場所と思われ、「もろともに」は「一緒に」という意味なので、ここでは、筑紫に帰る女と本妻と一緒に山崎に行ったと考えられる。本妻は、その前の文で、女と一緒に住むことに慣れてしまったために、女が去っていくことを悲しんでいる、とある。そこで、本妻は女を見送ったと考えられる。そこで、女を舟に乗せたのも本妻、すなわち「もとの妻」である。したがって正解は(ウ)となる。

問5 文脈を理解し、文節相互のかけり受けを読み取る問題。「どの語句にかかるか」とは、どの語句に直接意味がつながっていくか、

ということなので、本文を丁寧にたどりながら、文節相互の意味内容の関係をつかむ。

傍線部「さし出でて」は、直前に「おもてを」とあり、「おもて」はここでは「顔」を意味するので、「顔をさし出して」という意味になる。また、主語は「舟に乗りたる人」、すなわち筑紫の女であり、「車を見ると」と説明があるので、車を見るために、女が舟から顔を出しているのである。この車には見送りの夫と本妻が乗っている。そこで、「顔をさし出して」に直接つながる女の動作は、「見おこせければ」となる。「見おこせ」はサ行下二段活用の動詞「見おこす」の連用形で、「こちらの方を見る」という意味を表す。「こちらの方」とは車に乗っている夫と本妻の方である。女は二人と別れることを名残惜しく思い、舟から顔を出して、いつまでも二人の姿を見ていたのである。したがって正解は(エ)となる。

なお、(ア)の「漕ぎゆけば」は女自身が舟を漕いでいくわけではないので不適切である。(イ)や(ウ)では、顔をさし出して、という動作に直接結び付く内容として不自然。(イ)の「遠くなる」は舟や女の姿が遠ざかるという意味であり、(ウ)の「小さくなるまで」は「見おこせければ」の修飾句、つまり説明の語句にあたる。また、(オ)の「悲しかりけり」は、女が夫や本妻の方を見た結果、女が感じた気持ちであるから、やはり直接続くのは、まずはこちらを見たという内容、「見おこせければ」になる。